

フリードランダー、ソール編『アウシュヴィッツと表象の限界』未来社、2013、1994(1992).

カルロ・ギンズブルグ

・二人の生き残りをめぐる複数の歴史記述、一人の証人は証人として認められることのないというユダヤ人とローマ人の法的伝統 (94)

・筆者にとっては、しかし、ひとりだけの証言者の歴史研究における価値をいかに認めることができるかが問われるべきだという

・ミシェル・ド・セルトーが『歴史のエクリチュール』において提起した、書く歴史家という考え方が一般化した今においても、古びた「現実」概念を排斥すべきではない、それはフォーリソンの態度に対するド・セルトーの憤りが表明された彼の手紙にさえもあらわれている。(98)

・フィクションと歴史の区別に関する議論、ド・セルトー、ホワイト『メタヒストリー』らの著作 (99)

・ギンズブルグの指摘によると、ホワイトの知的源流は、20世紀初頭イタリアの哲学者クローチェによる歴史記述を参照していながらも、そのアプローチはむしろ、クローチェが同時代に批判した反歴史主義者及びファシストたるジェンティーレのそれへと接近していたという

・1912年レナート・セッラによる『兵士の団の一団のリビアへの出発』は、クローチェがトルストイの戦争の表象において還元されえない物的証拠を一蹴したことに対して、セッラは、トルストイの側に理解を示したことをきっかけに持つ作品であり、セッラはクローチェにこうした歴史の記録、表象の問題は、しかしより込み入っていると伝えている。セッラの「記録資料」への信頼性についての考え方。(114-116)

・セッラの立場を参照しつつ、ギンズブルグは、一方に実証的歴史研究があり、一方に歴史叙述があるという区分を斥け、例えばただ一人の目撃者の証言は、そうした区分を否定するような実験的なケースであり、「利用可能な証拠についての読み取り方の相違がそのまま直接に叙述にも影響を与える」ことになる。(117)